

2018 年 12 月 陸前高田グローバルキャンパス運営機構





陸前高田グローバル キャンパス運営機構 機構長

八代 仁

「震災後、多くの学生達が来てくれるが交流の場所がない。」という戸羽市長のお話をいただいて、岩手大学と立教大学とが2015年から準備に取り組んできた陸前高田グローバルキャンパスが2017年4月25日にオープンしました。お陰様で初年度は見学者を含め5千人を超える方々にご利用いただき、海外からの訪問者も多数いらっしゃいました。キャンパスは旧高田東中学校の校舎を利用していますが、校庭には未だ仮設住宅が残っています。市長の提唱された「交流」には訪問者である学生間のほかに、市民との交流も重要な要素となっています。陸前高田グローバルキャンパスはそのような交流機能と併せて、減災・防災を考える拠点としての機能も目指します。この趣旨にご賛同いただいた方々から多額のご寄付を頂戴し、館内の設備整備や子ども向けプログラムの実施などに使わせていただきましたが、引き続き、皆様のご支援を切にお願い申し上げます。



2017年4月に「陸前高田グローバルキャンパス」を開設して以来、陸前高田市民の皆さまはもちろん、国内外の学生や研究者、企業や行政関係者など、多くの方々にご活用いただきました。「学びを通してつなぐ」、「学びを通してつたえる」、「学びを通してつくる」という3つの事業コンセプトのもとに、市内外の団体等による活動、陸前高田グローバルキャンパスによる自主事業、岩手大学・立教大学による各校の特色をいかしたプログラムなど、様々な形態の事業やプログラムがこのグローバルキャンパスを舞台に展開されています。この度、2017年度の活動を1冊の報告書として纏めましたので、ご高覧いただければ幸いです。最後に、関係各位のご支援とご協力により、陸前高田グローバルキャンパスの運営を円滑に実施できましたことに心より感謝申し上げます。



陸前高田グローバル キャンパス運営機構 副機構長

池上 岳彦 [立教大学統轄副総長]

陸前高田グローバルキャンパス2017年度報告書

目 次

■ご 挨 拶	
陸前高田グローバルキャンパス運営機構 機 構 長 八 代 仁	
陸前高田グローバルキャンパス運営機構 副機構長 池 上 岳 彦	
■ 1 陸前高田グローバルキャンパスの概要	3
■ 2 陸前高田グローバルキャンパスでの取り組み	5
■ 3 陸前高田グローバルキャンパス 利用状況等	21
i)利用者数 ······	21
ii) 陸前高田グローバルキャンパスで行われた活動一覧	22
■参考資料	
陸前高田グローバルキャンパス関連組織の構成	23
陸前高田グローバルキャンパス館内図及び設備	25
陸前高田グローバルキャンパス利用料金表	26
陸前高田グローバルキャンパス関連冊子等	27
新聞記事	28
注:新聞記事は掲載許諾期間終了のため削除しています。	_3
江・利川町では1944計21111111111111111111111111111111111	



1

陸前高田グローバルキャンパスの概要

陸前高田グローバルキャンパス(RTGC)は、2017(平成29)年4月25日にオープンした交流活動拠点で、陸前高田市の支援を受け、岩手大学(盛岡市、国立大学)と立教大学(東京都豊島区、私立大学)が共同で運営しています。

2017年4月25日の開所式には岩渕明岩手大学長、吉岡知哉立教大学総長(当時)のほか、戸羽太陸前高田市長をはじめ一般市民など約120名の方々にお集まりいただきました。



左から八代 RTGC 運営機構長、岩渕岩手大学長、伊藤明彦陸前高田市議会議長、千葉茂樹岩手県副知事、 戸羽陸前高田市長、吉岡立教大学総長(当時)、たかたのゆめちゃん

建物は旧陸前高田市立米崎中学校の統合・移転に伴う空き校舎で、陸前高田市が国の地方創生加速化交付金により教室等の改修を行い、その2.3階部分をRTGCとして管理・運営しています。

岩手大学は東日本大震災からの復興支援活動で、多くの学生・教職員が陸前高田市を訪れ、ボランティア活動や地域コミュニティ再生のための支援活動を行っていました。立教大学は2003(平成15)年から陸前高田市矢作町生出地区で夏季の正課外教育プログラム「林業体験」を開始したことを契機に、様々な市民との交流事業を行っており、東日本大震災以降は学生・教職員による災害ボランティア活動も行ってきました。

両大学は、様々な活動を行う中で、より地域に寄り添いながら、教育・研究面でも効果の高い活動を模索していたところ、陸前高田市からの声掛けを端緒に、2016 (平成28) 年1月に陸前高田市、岩手大学、立教大学による相互協力及び連携協定を締結するに至りました。

協定締結後は、3者による連携推進協議会、その下部組織として連携推進協議会企画運営委員会を設置し、陸前高田市と両大学の連携による新たな事業について検討を行い、両大学だけでなく陸前高田市を訪れる全ての大学等の活動拠点となり、また、そこに「たまたま」集まった学生や市民が交流し、新たな取り組みや価値の生まれる場を作ることが、陸前高田市をはじめとする東日本大震災で被災した三陸沿岸の復興の加速に繋がるとの考えから、交流活動拠点を設置することとしました。

その後は、交流活動拠点のコンセプトや名称、必要な施設・設備、具体の運営方法などについて、1年近くにわたり企画運営委員会で検討を重ね、2017年4月の開所を迎えました。

RTGC の運営は岩手大学と立教大学が設立した「陸前高田グローバルキャンパス運営機構」が行い、日常の管理は地元 NPO 法人の P@CT に業務を委託しています。両大学からの会費と陸前高田市からの補助金のほか、賛助会員による会費や施設利用料等で運営しています。

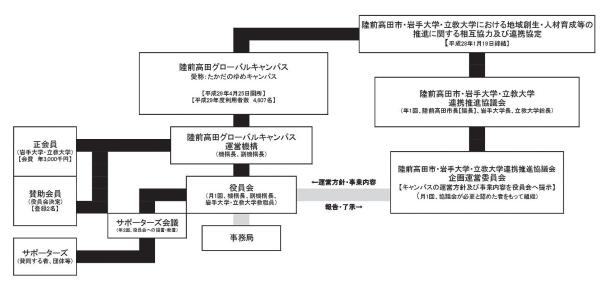


図 RTGC 運営体制

今後は、市内外の各種団体等による活動場所の提供のほか、自主事業の企画・実施などを通じて、被災地の復興や地域創生のモデルとなるよう、努力してまいります。

また、研究者による長期レンタルスペースの利用促進、利用者の利便性向上を目的に、設備整備を行っていきますので、ぜひご利用ください。





陸前高田グローバルキャンパスでの取り組み

陸前高田グローバルキャンパス (RTGC) は、2017 (平成29) 年度に4,600人以上の方々が来館し、様々な取組の場としてご利用いただきましたが、その内容を紹介いたします。

■ 岩手大学震災復興に関する学修 ― 2017年5月13日

岩手大学では、新入生全員に対して「震災復興に関する学修」を実施しています。

震災で各市町村がどんな被害を受けたのか、現在はどのような状況になっているのか、将来に向けてどんな取り組みが行われているのかを、まちの空気を肌で感じながら学んでもらおうという事



業です。今年度は陸前高田市に複数のクラスがおじゃましています。

その第1回が5月13日に開かれました。マルゴト陸前高田、陸前高田復興支援連絡会にご協力いただき、理工学部化学・生命理工学化生命コース約30名が、市内視察のあと、講話とワークショップ。 どのような生活を選択するか、都市と地方での生活の違いなどがテーマになりました。

1年生にもかなりの刺激になった様子です。

■ 「あがってかだって大作戦」第1弾 オリジナルプランター作り — 2017年5月28日

岩手大学の陸前高田応援チーム「岩大 E_code」(がんだい・いーこーど)の主催で陸前高田グローバルキャンパス「あがってかだって大作戦 第1弾」が実施されました。

市民の方々に、グローバルキャンパスをより身近に感じてもらう機会になれば、そして大学生と市民の交流の場となれば、という趣旨で実施。良いお天気の中、名作と迷作のプランターが出そろい、そこにマリーゴールドの花と苗が植えられました。おだやかで気持ち良い一日になりました。



■ 立教大学と岩手大学の合同哲学カフェ ― 2017年6月3日

立教大学の河野哲也ゼミ、岩手大学の字佐美公生ゼミがキャンパスを訪れ、岩手大学人文社会科学部、教育学部1年生の「震災復興に関する学修」にジョイントし、合同で哲学カフェを実施しました。



市内視察のあと、市民の村上氏に講話をお聞きしたあと、コミュニティや祭りの意義について哲学対話を行いました。

都会の大学生と地方の大学生のリアリティの違いも浮き彫りになるなど、双方にとって新鮮な体験になったのではないかと思います。

■ 「子どもてつがく探検隊」第2回 — 2017年6月4日



子どもたちに主体的に考え学んでもらおうという趣旨で 実施されている「子どもてつがく探検隊」の第2回が6 月4日に実施されました。(立教大学河野哲也教授、岩手 大学宇佐美公生教授のゼミなどが取り組む RISTEX「持 続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域のプロ ジェクトの一環として実施。)

箱根山気仙左官伝承館で気仙大工・左官の技や歴史など についてお話を伺ったあとに、グローバルキャンパスの

ワークショップルームで哲学対話を実施。子どもたちと大学生が車座になって、今の生活と昔の生活などについて深く語り合いました。

■ 陸前高田・夢がふれ逢う〜お楽しみ「朗読会」 (朗読ネットワーク日本&立教大学陸前高田サテライト主催) — 2017年6月25日

6月25日(日)に、午前中の立教野球教室@陸前高田に続いて、立教大学陸前高田サテライト運営委員会及び朗読ネットワーク日本が主催し、米崎中学校仮設合唱隊の協力により、陸前高田グローバルキャンパス内のモンティ・ホールにおいて午後2時から「朗読会」が開催されました。

本企画は、立教大学卒業生でもある朗読ネットワーク日本の堀田夫妻から立教大学陸前高田サテライト開設を記念して「朗読会」を開催したいとの申し出があり、実現したものです。当日は50名を超える方々にご参加いただきました。ありがとうございました!初めに立教大学の卒業生で東海新報の記者でもある司会の鈴木英里さんから堀田夫妻の紹介があり、続いて堀田紀眞さまにより、山本周五郎作『糸車』、が披露されました。その後、陸前高田



市在住の金幸枝さまによる「金子みすず詩集より~詩の朗読」、佐藤圭子さまによる「気仙民話より 『ばかの一つ覚え』、そして米崎仮設合唱隊のみなさんによる合唱が披露されました。そして最後 に、堀田紀真さまにより戸田宏明作『人情・安宅の関』が朗読されました。

堀田さまによる文学作品の朗読の奥深さに感動し、金さまによる詩の朗読に心揺さぶられ、佐藤 さまによる気仙民話に大笑いし、合唱隊のみなさんの美しい声に聞き入った2時間でした。

朗読会の終了後にはラウンジにおいて、堀田さまご夫妻がご用意してくださったお菓子を頂戴しながら、しばし楽しい歓談の時を持ちました。

■ **農を通して食と健康について考えるワークショップ** — 2017年7月3日

地元陸前高田市で活動されている「りくカフェ」スタッフとスマートクラブのメンバー、陸前高田市地域女性団体協議会のメンバーの計30名と、地域ぐるみで有機農業に30年以上も取り組んできている山形県高畠町上和田有機米生産組合の渡部現組合長と菊地初代組合長により、標記ワークショップが立教大学陸前高田サテライト運営委員会の主催で行われました。

午前10時から、ワークショップルームで渡部現組合長による健康体操で体と気持ちをほぐし、会場をモンティ・ホールに移し同組合長による上和田有機米生産組合のこれまでの歩みと活動の紹介がありました。続いて菊地初代組合長から30数年にわたる実践と実績そして科学的な根拠に基づき



病気に罹らない健康な体作りに無農薬玄米を食べること、 そうした活動を運動として地域ぐるみで取り組むことの重 要性と意義について講演がありました。質疑応答の後、休 憩をはさんで食事の提供や体操教室などで健康な体作りに 取り組んでいる地元のりくカフェの鵜浦さんと吉田さんか ら、取組について紹介がありました。

活動紹介と講演、そして意見交換終了後に会場をラウンジに移し、昼食を取りました。昼食には、あらかじめ高島から送っておいた3分づき米に大豆や赤米、黒米など8種



類の雑穀などを加えたものを前夜から12時間水に浸し、直前に地元陸前高田でその日の朝捕れたホタテとワカメを加えた炊き込みご飯に、地元で収穫された新鮮朝採り野菜を菊地さん自家製の味噌に付けて食べるという、まさしく高田と高畠のコラボ飯が振る舞われました。本当に絶品の美味しさで一同大感激・大興奮して食べました。

今回の企画は、30年近く上和田有機米生産組合に農業体験で交流を続けてきた立教大学が、同じ東北の地にあって林業体験や震災以降の活動で交流を深めてきた陸前高田の市民の方々を結び付けたいとの思いから実現したものです。農薬全盛の時代に無農薬・低農薬の農業に取り組み、幾多の苦難を乗り越えて地域ぐるみで活動を続けてきた上和田有機米生産組合の活動に、これからの陸前高田の新しいまちづくりのヒントがあるのではないかと考えています。高畠町では有機農業を核にすえた農業・医療・教育そして文化を行政も巻き込んだ形で統合的に取り組んでいく町づくりが進められてきています。多数の尊い命が失われた高田だからこそ、命の尊さを知っている高田だからこそ健康な命を育んでいく活動が広がっていく可能性が秘められているのではないでしょうか。

■ NPO法人主催国際ワークキャンプ 岩手県内の高校生と外国人との合同ワークキャンプ — 2017年7月8~9日

7月8日・9日の1泊2日で、岩手県内に住む高校生を対象に、国際交流とボランティア活動を通じて地域について考える機会にしてもらおうと「グローバルユースキャンプin陸前高田」を実施しました。主催は、国内外でワークキャンプという合宿型のボランティアプログラムを企画運営している、NPO 法人 NICE。今回 NICE からはカナダや韓国、ロシアからボランティアが集まりました。岩手県の沿岸部に住む高校生と、内陸部に住む高校生、計29人が参加してくれ、1日目は牡蠣養殖の手伝いや、気仙茶畑の草刈りなどのボランティアワーク、夜には国際交流ナイト、2日目はワークショップを行いました。さすがは二番目に大きい都道府県の岩手県。内陸と沿岸ではいろいろな違いがあるようで、「岩手に茶畑があるなんて知らなかった」「漁業のお仕事は初めてやるので新鮮!」「方言が違う!」など、国内外の違いだけでなく、同じ県内にもさまざまな発見があったようです。また2日目に行ったワークショップでは、地元の団体に協力してもらい「岩手を世界に発信するキャッチコピーをつくろう!」というテーマで4つのグループに分かれて考えてもらいました。岩手のいいところを出すことから始まり、一つにまとめることに悪戦苦闘するグループもありましたが、最後には見事それぞれ個性的なキャッチコピーを作り上げました。どのグループ



も、岩手の自然や人のやさしさなど、ガイドブックではわからない地元の人が知っている岩手の魅力を、たくさん出していたことが印象的でした。

今回のプログラムは、地域で活動している大人と出会うこと、 自分の住んでいる地域について主体的に考える体験をすること、 岩手県内の同世代の人とつながること、英語をコミュニ ケー ションツールだと実感することを目的として企画しました。岩手 の大事な担い手たちがつながりあって、いつか岩手で面白いことをやってくれたらいいなぁと思います。 (NPO 法人 NICE 東北事務局 三上はる菜)

■ 東京大学・プリンストン大学サマープログラム2017 — 2017年7月9~14日

2017年7月9日~14日の5泊6日で一般社団法人マルゴト陸前高田が受入れ先となって、東京大学・プリンストン大学サマープログラム2017が開催されました。参加者は14名(東京大学5名、プリンストン大学5名、スタッフ4名)、滞在中の4日間、ミーティング等でグローバルキャンパスを利用されました。



今年度のテーマは、「陸前高田の魅力を海外にどのように発信できるか?」でした。このテーマのもと市内で6日間フィールドワークをしていきました。内容は、市内の観光資源となりそうな文化や、人、産業の見学で、普門寺を訪問し住職さんの講話を聞いたり、気仙大工の技術を継承している小泉木工所さんを訪問し、実際にものづくり体験をしたり、陸前高田市のお米ブランド"たかたのゆめ"について農家さんから直接話を伺ったり、菊池畳店の菊池純一さんから震災後のコミュニティ再構

築の課題などについて生の声をお聞きし活発な議論が繰り広げられました。この他にも、二泊三日の民泊体験をするなど、大変盛りだくさんのフィールドワークでした。

最終日には両大学から、(一社)マルゴト陸前高田へのインバウンド事業に関する一般公開提言 発表会がグローバルキャンパス内のモンティ・ホールで開かれました。市内外の方も参加され大変 有意義な場となりました。

発表会では、外国の方に陸前高田をイメージしやすい伝わりやすいキャッチフレーズやイメージロゴの紹介、SNS などを使用して効果的に街の魅力を発信するための手作り動画のお披露目もありました。また農業や漁業の担い手が減少していることから、家業のお手伝いと民泊を合体させて、長期滞在型産業貢献型の民泊プログラムの提案などもありました。

(一般社団法人マルゴト陸前高田 横澤亜耶)

■ "雨にも負けず"宮沢賢治の勉強会 (第3回) (東京農業大学両角研究室主催) — 2017年7月23日

7月23日(日)、グローバルキャンパス内の講義室を使用して、陸前高田市民を対象に、"探究 『賢治スコープ』体験学習会"と称する宮沢賢治の童話作品の勉強会を実施しました。

これは、"身近な自然環境の荒廃という地域問題への気づき"を全体テーマとして、その解決策のヒントを宮沢賢治の童話作品の中から探求し、町の歴史や文化に触れ、自然環境への理解を深め

ながら、地域の未来のあり方を学習していく森林 ESD の 試みとして実施しているものです。

この日は大雨警報が発令されるほどの悪天候の中、9名 の賢治の愛好者がこの勉強会に参加してくださいました。

今回は第3回目として、前半は『注文の多い料理店』を 取り上げ、"山猫は2人の紳士を本気で食べようとしてい たのか"をテーマに、日本女子大学に所属する調理学の研 究者が、専門家の立場から作品に描かれた調理方法を検証 し、人間に対する山猫の真意は何であったのか、自然の生





き物の視点から探求しました。

そして後半は、東京農業大学に所属し環境共生学を専攻する講師より、地元の霊山"氷上山"を テーマに、この山が賢治の作品でどう大切に描かれているかを紹介しながら この山の魅力をとら え、賢治流の地域の自然の見方として『楢ノ木大学士の野宿』をテキストに、地学、歴史学、文学 の多角的視点から、氷上山と周囲の山々との比較探求をしました。

90分という長めの講義時間にもかかわらず、受講者から「内容が楽しくて時間が本当に短い。今 から次回が楽しみ、絶対に参加する!」といった好意的な意見や感想が寄せられ、「"風の又三郎" との出会いを紡彿させる、不思議なエネルギーに満たされた時間」との評価もいただきました。

賢治作品を通してみた、"自然環境問題への気づき"をテーマとする勉強会も、次回の8月で一 応の区切りをつけます。いよいよ最終回は、間伐という環境課題を解決する地域の明るい未来像 "木炭発電の取り組み"について探求していきます。

~地域の未来のために、宮沢賢治が一番したかったことは何か~

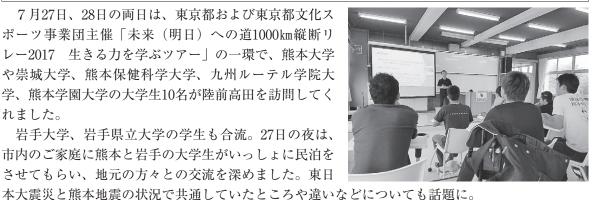
賢治の遺志を現代に引き継ぐ『グスコーブドリの"電気"』の世界をどうぞお楽しみに。

■ 熊本の大学生と岩手の大学生が交流 — 2017年7月27~28日

7月27日、28日の両日は、東京都および東京都文化ス ポーツ事業団主催「未来(明日)への道1000km縦断リ レー2017 生きる力を学ぶツアー」の一環で、熊本大学 や崇城大学、熊本保健科学大学、九州ルーテル学院大 学、熊本学園大学の大学生10名が陸前高田を訪問してく れました。

岩手大学、岩手県立大学の学生も合流。27日の夜は、 市内のご家庭に熊本と岩手の大学生がいっしょに民泊を させてもらい、地元の方々との交流を深めました。東日

ミュニティの意義や災害後の意思決定などについて学びました。



28日朝には、陸前高田グローバルキャンパスで岩手大学の教員の話題提供で、大学生が災害後の 地域とどのように関わることができるかについて考えました。そのあとは長洞元気村で、地域コ

短い時間でしたが、普段は遠い距離を隔てた地域同士の貴重な交流がうまれた夏のひとときとな りました!

■ 関西大学商学部長谷川ゼミが陸前高田で10日間研修 ―― 2017年8月1~10日

8月1日から10日まで、東日本大震災からの復興と国際協力を学ぶ関西大学商学部長谷川ゼミ ナール (3年次生10名) は、陸前高田で研修を実施しました。地元の語り部の方から震災時に何が 起こったのかを学んだ後、2日と3日は4チームに分かれて集落(横田町中心部、気仙町長部地 区、米崎町和野地区、小友町上の坊地区)に入って、五感を働かせて歩いたり、出会った方々に話 を聞いたりするなどして、その集落の「あるもの探し」(魅力の発見)を行いました。学生たちは 最初不安にかられていましたが、一歩踏み出すと出会いに恵まれ、陸前高田の方々の温かさにふれ ることができました。あるゼミ生は「横田町で泊まらせていただいて、あるもの探しをして最初は 不安やったけど最後はもっとここにいたいし、またここに来たいと思った」としていました。

4日と5日は、広田町で民泊をさせていただきました。わかめの袋詰めや大型冷蔵庫の清掃、ト マトやミョウガの収穫などを体験し、新鮮な野菜や魚の手作りの料理に舌鼓を打ちました。竹を切 りだしての流しそうめんもできて、温かく迎えていただきましたし、受け入れていただいたご夫婦

の豊かな知識と哲学には学生たちはただただ圧倒されていました。ゼミ生の一人は「お手伝いやお昼ご飯を一緒に食べさせて頂いて離れるのが寂しいなって思ったし改めて民泊の良さを感じた」としていました。

6日と7日は、うごく七夕祭り荒町組のお手伝いをさせていただきました。あいにく天候には恵まれませんでしたが、荒町組のみなさんから逆にたくさんの元気をいただきました。ゼミ生たちは「荒町組の方々をはじめ、祭りに参加している皆さんがとてもかっこよくて見ているだけでも楽しめたし、さらに一緒に掛け声を出し山車を引いたりできてとても楽しかった!」「山車を初めてひいてあんなに重いものだと知らなかったし、準備は大変だったけど本当に参加して良かった!」などとしていました。

9日には、聞き書き作品の鑑賞会を開催しました。長谷川ゼミではこの数年、1対1で人生を丸ごと聞き、記録に残していく「聞き書き」を陸前高田でも行ってきました。今回話し手となった佐藤一男さん(防災士)と吉田和子さん(りくカフェ経営)を招いての「聞き書き」地での作品鑑賞会を行いました。お二方の人生を味わいながら、震災当時の支援物資から防災や食育に話題がふくらみ、地元の方同士が出会う機会にもなりました。あるゼミ生は「陸前高田で聞き書き鑑賞会をしてよかったと心の底から思えた



し、もっとたくさんの人の色々なお話を聞いてみたいと思えた」とのことです。

研修最終日の成果発表会では、ゼミ生全員が研修で感じたことを図解にしてポスターセッション 形式で発表しました。

急なアナウンスにもかかわらず、ボランティアで来ていた立教大学の学生のみなさんも含めて十数名の方に参加していただきました。

発表した図解のタイトルを一部紹介します。「現地の方々が優しく受け入れてくださったおかげでとても内容の濃い研修となり、震災の被害の大きさや人と人とのつながりの大切さ、現地の方々の陸前高田市への愛を感じた研修であった」「出会うひとりひとりの物語を聞くことから深く学び考え、そのことが自分の力の蓄積になると知った研修だった」。(関西大学商学部准教授長谷川伸)

■ 立教大学 RSL-ローカル (陸前高田) — 2017年8月4~8日

立教サービスラーニング (RSL) の実践系科目として、8月4日から8日の期間に陸前高田での活動を行いました。様々な学部、学科、学年から22名の学生が参加し、地域の方々との交流や地元ならではの活動に参加させていただきました。

陸前高田の市街地見学では、東日本大震災発生当時の様子や現在に至るまでの街の状況や、地元 に暮らす人々の思いに触れながら各所を訪問しました。広田地区のコミュニティセンターでは、災



害公営住宅等にお住まいのお年寄りの方々とお茶っこをし、昔の街や暮らしの様子を教えていただきました。また、陸前高田の名産の一つである米崎リンゴの果樹園にて、農作業のお手伝いを行い、地域の特産物を支える力や産業の持続について考えました。

そして、陸前高田の伝統的な夏のイベントである「けんか七夕」への参加として、前日の山車の飾り付けから、当日の山車引き、翌日の片付け作業のお手伝いをさせていただきました。一緒に山



車引きをした地元の高校生が、お祭りについて生き生きと話してくれる姿に学生たちは聞き入りました。

グローバルキャンパスの教室では、地元の方々からのお話しや体験した活動をもとに、学生たちが地域の多様な資源や可能性について議論し、大学での学びや身近な行動としての今後の協働のあり方について、活発に意見を交わしました。 (科目担当者 秋本みどり)

■ ハーバード大学・岩手大学 **陸前高田グローバルセミナー2017** — 2017年8月5~8日

岩手大学大学院地域創生専攻は、地域の課題を直接的に理解し、教育において課題を意識した研究活動を進め、地域の復興・創生を推進するために、国内のみならず海外にも視野を広げた、グローバルコミュニーケーション(必修科目)を開講し、異文化コミュニケーションを学ぶことにしております。

陸前高田グローバルセミナーでは、ハーバード大学の学生(5名)と岩手大学大学院地域創生専攻の学生(5名)が参加し、陸前高田市における震災後の復興への取組状況や視察を確認するとともに、市内で繰



り広げられた「うごく七夕・ケンカ七夕」に参加、それを踏まえ、学生同士でディスカッションを 行い、最終日に戸羽市長による講話の後、自分の出身地の防災計画を作成し、日本語・英語で発表 し、修了証書をいただきました。

ハーバード大学の学生達からは、「驚きの連続の数日間でした。素晴らしい内容でとっても楽しみました。是非、再度参加したいです。」と、また同様に「陸前高田での素晴らしいプログラムありがとうございます。陸前高田市の素晴らしい復興の進展を目の当たりにして、謙虚に大感激であり、自分も何かをしなければならないと実感させられる体験でした。」と、感想を寄せてくれました。

■ **国際ボランティア in 陸前高田** — 2017年8月8~11日

2017年8月8日から11日の3泊4日の期間、岩手大学と立教大学の日本人学生と留学生総勢22名が陸前高田市内でボランティア活動を実施しました。岩手大学グローバル教育センターの主催で実施された本事業では、初日に被災地の現状について学ぶ視察を行い、二日目と三日目は終日ボラン



ティア活動を展開しました。活動場所は黒崎仙郷温泉、川の駅よこた、気仙大工左官伝承館、グローバルキャンパスの4箇所で、環境整備や鉋の油引きなど、通常業務では人手不足のためになかなか手が回らなかった作業を、それぞれの施設の関係者の指導の下、若い力が協働して引き受けました。最終日は陸前高田グローバルキャンパスにおいてそれぞれの活動場所での活動報告と今後のための課題などについてディスカッションとグループ発表を行いました。

■ Summer Day Camp in Rikuzenntakata! ~子供たちと英語でふれあい遊び~ — 2017年8月9日

2017年8月9日、市内の幼児・小学生(低学年)を対象にした英語を使ったふれあいイベントがグローバルキャンパス内のモンティ・ホールで開かれました。参加者は24名(子供15名、大人9名)。

このイベントを主催するにあたり、2017年4月に完成したグローバルキャンパスのモンティ・ホールで子供たちが大好きだったモンティー・ディクソンさんの意思を継いで行きたいという思いから、まず市内の子供たちに楽しく英語にふれる事から始めてもらおうと、このイベントを企画しました。



参加していただいた子供たちは、最初はとても緊張していた様子でしたが、音楽に合わせて歌ったり、踊ったり、日本語と英語の動物の鳴き声の違いを実際聞き、自分がその動物になりきって声を出したりなど、たくさん英語にふれることができ、すごく楽しんでいたようでした。最後に英語の絵本の読み聞かせをし、子供たちが真剣にお話を聞いてくれていたので、私たちもとても充実した時間を過ごすことが出来ました。

子供たちが楽しく英語を覚えたい、話してみたいというキッカケ作りのお手伝い出来たら思っており、モンティーの意思を忘れることないよう敬意を表し、今後もまたモンティ・ホールでたくさんの子供たちのために楽しく有意義なイベントを考えていきたいです。

【主催:ランス スティルプ (アメリカ合衆国出身)、武藏直美 (陸前高田出身)】

■ **盛岡中央高校 陸前高田グローバルキャンパス研修** — 2017年8月11日

盛岡中央高校では、毎年、夏休み明けに「CHUO 国際教育フォーラム」という行事をおこなっております。この行事は、所定のテーマについて海外の姉妹校生徒とともに共同研究をし、発表をおこなうものです。今年はその第19回目をむかえ、国内、海外の姉妹校21校を招いて、8月31日にマリオス盛岡地域交流センターで開催いたします。



このたび、その研究テーマ四つのうち、「国際ボランティア」「環境問題から考える防災」の2グループ、15名の生徒が8月11日にグローバルキャンパスにお邪魔させていただきました。立教大学・岩手大学の学生、留学生の皆さんが3泊4日で協働ボランティアをおこなっている、その最終日に参加させていただきました。

午前中は、大学生の先輩たちのプレゼンテーション の準備、発表を見学させていただきました。英語が飛

び交う中で、プレゼンテーションを組み上げていく過程は、とても参考になりました。発表に対する質問の機会を与えていただき、本校の生徒たちもせいいっぱいの質問を先輩たちにぶつけておりました。

昼休みは、大学生の先輩たちとランチをご一緒させていただきました。気さくな先輩たちのおか げで、すぐに打ち解け、コミュニケーションをとっておりました。

午後は、それぞれの研究テーマに分かれ、ご講義をいただくとともに、フォーラムで発表するプレゼンテーションを見ていただき、ご指導をいただきました。



「町づくりは、人づくりから。」陸前高田市参与の村上清先生からいただいた言葉の重さを胸に、 グローバルキャンパスを後にしました。 (盛岡中央高校 教諭 谷村長敬)

■ 「あがってかだって大作戦」第2弾 釣り大会 — 2017年8月20日

岩手大学の陸前高田応援チーム「岩大 E_code」の主催で陸前高田グローバルキャンパス「あがってかだって大作戦 第2弾 釣り大会」が実施されました。

市民の方々に、グローバルキャンパスをより身近に 感じてもらう機会になれば、そして大学生と市民の交 流の場となれば、という趣旨で開催する会の第2弾で す。

地元のつりの達人の方々にご指導いただきながら、



小さなお子さんからシニアの方まで、さまざまな世代があつまって大沢漁港へ。今一つの天気ではありましたが、けっこういろんな魚を釣ることができました。見学者も含めて27名。おだやかでにぎやかな釣り大会となりました。

グローバルキャンパスにもどって第二部は、やはり釣り名人の方々が見事な料理の腕を発揮してくださり、たいへんおいしい懇談の時間。

ゆったりした時間がながれた一日でした。

■ 地元英語人財の育成を通じて被災地の長期的復興へ! (一般社団法人はなそう基金) — 2017年9月



一般社団法人はなそう基金では、2011年11月から東北被災地での地元英語人財の育成を通じた長期的復興支援に取り組んでいます。おもな会場は岩手県陸前高田市。毎月一回、金曜日夜~日曜日昼までの日程で現地にボランティア講師10名前後で滞在し、「英語音読会」という英語学習の場を提供しています。参加登録者は2017年10月現在で約80名。小学校低学年のキッズから中高生、上は70~80代のおじいちゃん、おばあちゃんまで、英語の音読学習に取り組んでいただいて

います。"One-on-one"形式を基本とし、個人別に興味のあるテーマを選んで、ボランティア講師と一緒に学習するスタイルです。

その金曜日夜の会場として、2017年9月から陸前高田グローバルキャンパスを活用させて頂いています。当基金のボランティア講師の一人が立教大学OBであり、その方のご縁から池袋の立教大学の方へ伺い、考え方などに意気投合致しました。当基金としても積極的にこの素晴らしい施設を活用させて頂こうと思っております。中学校の校舎として使われていた施設ですので、建物はしっかりしていますし、「教室」だった部屋がそのまま使えるのも魅力的です。また、教室形式の部屋以外にもラウンジや多目的スペースが色々とあり、使いやすく過ごしやすい環境になっています。

このような場との出会いに、感謝しております。

(一般社団法人はなそう基金 代表理事 古森 剛)

■ 立教大学・スタンフォード大学の学生がフィールドワーク — 2017年9月7~11日



立教大学「陸前高田プロジェクト」は、 立教・スタンフォードの学生が合同で陸前 高田市においてフィールドワーク(4泊5 日)を行い、与えられた課題を踏まえコン テンツを作成するという課題基盤学習型 (Project-based Learning) プログラムで、 2015年からは立教大学の正課科目として実 施しています。9月7日~9月11日に陸前 高田グローバルキャンパスを活動の拠点と

し、11名の立教大学生、7名のスタンフォード大(アメリカ)学生が課題に取り組みました。今年の課題は、"陸前高田市の現状や課題を共有した上で、魅力を発信するコンテンツ(動画、画像、音)を作成する"。多くの方々からお話しをうかがい陸前高田での生活を体験し、外国人だからこそ感じる視点や学生ならではの視点を活かし、いかに外部に陸前高田の魅力を発信するべきかをグループに分かれ検討を繰り返しました。9月10日にはワークショップルームにて、戸羽市長、村上陸前高田市参与、マルゴト陸前高田、お話をうかがった皆様に向けて、取り纏めたコンテンツを発表する機会をいただきました。陸前高田の魅力に触れ、参加者からは今後も陸前高田に関わりたい、再度訪れたいとの声が多く挙がりました。

■ 立教大学落語研究会「サテライト健康寄席」── 2017年9月10日

9月10日、立教大学落語研究会はモンティ・ホールにて「サテライト健康寄席」を開催しました。落語会メンバー5名が落語を披露したほか、落語の歴史・お江戸事情などを紹介するコーナーや来場者参加型コーナーも設け、お客さまも一緒に落語を楽しんでいただきました。来場者参加型コーナーでは落語会メンバーが落語のしぐさの1つであるお蕎麦のすり方を伝授し、来場者全員で存在しない蕎麦をすするしぐさをする様子は壮観でした。会場は終始笑いに包まれ、お客さまも演者も楽しんで落語会を行うことが出来ました。



■ **あがってかだって第3弾 「ゆめきゃん大学ゼミナール第1講**」 — 2017年9月30日



岩手大学の陸前高田応援チーム「岩大 E_code」による「陸前高田グローバルキャンパス あがってかだって大作戦」企画の第3弾として、「ゆめきゃん大学ゼミナール」が実施されました。この催しは、

- ・ときどき陸前高田を訪問している大学生たちが、ふだんどんなことを勉強したり研究したり、考えたりしているのかを市民の方々に知ってもらう機会づくり
- ・市民の方々にも、得意なことや取り組んでいる こと、普段どんなことを考えたりしているのか



などについて大学生たちに(あるいは市民同士で)教えていただく機会づくり という趣旨のもとに企画されたものです。これらのことを通して、今までとは異なる形での陸前高 田市民と学生・教員との交流を生み出すことが目指されました。

第1回としては、学生プレゼンターとして岩大 E_codeメンバーであり教育学部の佐々木裕康が、「学校だけじゃない、私たちの教育」というタイトルでプレゼンテーションを行いました。また市民プレゼンターとして、SAVE TAKATA の山本健太さんが、「高田のこと、教えてください~ヨソモノからのお願い~」というタイトルでお話しくださいました。交流会を含めておよそ20名が参加。両者の話が微妙にクロスしながらのたいへん刺激的で、興味深い時間となりました。山本さんの日々、高田で奮闘して来られた経験と熱意、そして高田への愛情が深く感じられる機会ともなりました。山本さん、ありがとうございました!!

次回のゆめきゃん大学ゼミナールは、12月2日(土)に実施される予定です。

■ 復興庁 「結の場 in 陸前高田」 — 2017年10月26日

2017年10月26日、復興庁・陸前高田市・陸前高田商 工会主催のイベント、地域復興マッチング「結の場」 in 陸前高田が開催されました。

全国から支援企業28社54名が、陸前高田グローバルキャンパスを来訪し、陸前高田市内の事業者との対話を通して経営課題の共有と深堀を行いました。地元事業者としては、水産業や食品製造業、宿泊業など10社が参加。

各支援企業は地元事業者の抱える課題や希望などを 持ち帰り、新たな方向性を導く具体的な連携事業のプ



ランを検討し、提案することになっています。この日は参加者総勢121名。支援企業、地元事業者の双方に陸前高田グローバルキャンパスに関する理解を深めていただく機会にもなりました。

■ 岩手大・立教大の初の協働研究プログラム: **つなぐ・つたえる・学生交流と協働研究セミナー!** 2018年11月2~3日

2017年11月2日、3日の2日間、岩手大学理工学部化学・生命理工学科(小川研究室)と立教大学理学部化学科(箕浦研究室)の学生ら25名(教員:5名、大学院修士2年:7名、修士1年2名、学部4年11名)は、陸前高田グローバルキャンパスのモンティ・ホールを利用し、岩手大学・立教大学の学生交流と協働研究セミナーを実施しました。両大学の研究分野の近い2つの研究室の学生が互いの研究発表を通じて、研究面での学術的交流を行い、宿泊先でも懇親会を開催し、共同研究と同世代の交流のシーズを得ました。



一日目、岩手大学は盛岡から貸切バスで、立教からは 新幹線と在来線とレンタカーでグローバルキャンパスに 向かい、13時から協働研究セミナーを開始しました。モ ンティ・ホールは30名程度の講演会をするのに適したサ イズと設備を有しています。趣旨説明のあと、双方の大 学の学生が1人ずつ交互に研究内容についてのプレゼン テーションを行いました。発表後は、互いの研究内容に ついて質問を投げかけ、有意義な学びの時間を過ごしま した。 プログラム中、岩手大学を紹介するテレビ番組「ガンダイニング」の IBC 岩手放送(JNN 系列) および、岩手県の地方新聞社「東海新報」の取材もありました。

研究発表後は陸前高田のホテル三陽に移動し、両研究室で交流を深めました。懇親会では地元の郷土料理を戴き、両大学の学生達も、貴重な機会を存分に楽しんでおり、今回の研究交流会の継続を約束しておりました。

二日目は、朝食後に一度集合し、ホテル三陽の方から当時の被災状況のお話を伺いました。被 災当時の話は今でも痛ましく、学生共々改めて復興の祈りを捧げました。ホテルの方々に見送られ、再度グローバルキャンパスに移動しました。岩手大学助教・村岡宏樹先生と立教大学助教・菅 又功先生の講演を聞き、活発な質疑討論が行われました。最後に、岩手大学の小川智理事・副学長 から、閉会のお言葉をいただきました。閉会式で小川先生は「今回のセミナーを、ただ"楽しかった"で終わらせることなく、何か一つでも、自分の学びに役立ててほしい」と研究者としての学び の精神をお話された他に、「思い入れ深いこの地を実際に目にして、思いを巡らせてほしい」と、 復興に対する強いお気持ちも示されました。

プログラム終了後は市内を散策。被災の際に7万本の松の中から残った「奇跡の一本松」を見に行き、陸前高田市の復興に思いを巡らせました。その後、一本松茶屋に立ち寄り、特産品・お土産を購入し帰京しました。

両日、短期間の中で行われたプログラムでしたが、学生らは「互いに研究について学び合うことができ、有意義な時間を過ごせた」「6年経った今でも、震災の傷跡が残っている現状の景色に心が痛んだ。1日でも早い復興をお祈りする」と思いを話していました。

若い世代が実際に陸前高田に出向く意義と効果は大きいと感じられ、両大学で共通する様々な学問分野での研究交流が行われることを期待します。 (立教大学理学部化学科教授・箕浦真生)

■ 「戸口純と仲間たち たかたの夢ピアノ・コンサート」 — 2017年11月18日

2017年11月18日(土)14:00より、陸前高田市コミュニティホールにおいて、「戸口純と仲間たち たかたの夢ピアノ・コンサート」が、主催:立教大学陸前高田サテライト、共催:陸前高田グローバルキャンパス、後援:陸前高田市、陸前高田市教育委員会で立教たかたコミュニティ大学の第1弾として開催されました。当日は、180名を超える市民の方々にご参加いただきました。



第一部は、戸口さん(立教大学卒業)のピアノソロの演奏でした。バッハ、モーツアルト、ショパンから各1曲、ご自身が作曲した曲、坂本龍一の「戦場のメリークリスマス」、そして観客から頂戴した曲を複数にアレンジする即興演奏、と観客を魅了しました。

第二部は、ベースの川本悠自さん、ドラムの小松伸之さんを加え、ジャズトリオの演奏でした。 3人でスイングしながらの演奏。観客のみなさんも演奏に合わせながら体をスィングさ

せ、体全体で演奏を楽しんでいらっしゃいました。

戸口さんの「被災地に自分の演奏を届けたい」という6年半忘れることなく抱えてこられた思いと世界で活躍されてきた演奏家としての確かな技術レベルが確実に観客のみなさんに届きました。 演奏を聴かれた多くの方々から、これほど素晴らしい演奏を高田で聴けるとは思わなかった、来年 以降も是非継続して演奏を聴かせていただきたい、等々の賞賛の言葉を頂戴しました。

演奏会終了後にはジャズタイムジョニーに場所を移し、高田市内のジャズ愛好家の方々とジャズ セッションを楽しみました。



■ 立教大学陸前高田スタディツアー2017 — 2017年12月9~10日

2017年12月9日(土)~10日(日)の2日間、立教大学陸前高田スタディツアー2017を実施し、立教大学に在学する留学生(18名)と海外留学を予定している日本人学生(5名)の計23名の学生が参加しました。陸前高田市の復興状況を実際に見て、現地の方々とともに考えることで、被災地の現状と課題を認識するとともに、母国や留学先で自らの体験を伝えることで震災の風化を防ぐ一助とすることを目的として、2013年度から毎年度実施しています。

1日目、池袋西口で集合した後、新幹線と貸し切りバスで陸前高田市に入りました。一般社団法人マルゴト陸前高田の提供する「復興最前線ツアー」を利用し、復興まちづくり情報館、旧・道の駅「高田松原」タピック45、奇跡の一本松を見学した後、グローバルキャンパスに移動し、長洞元

気村の村上誠二さんによるご講話を拝聴しました。講話だけでなく、長洞集落における避難所の運営において実際に問題になった点(例:自治会活動に参加していなかった人に配給物資を分けるか否かなど)を題材としたクロスロードゲームも行いました。災害対応を自らの問題として考え、様々な意見や価値観を参加者同士で共有することができました。災害対応においては、必ずしも正解があるとは限らず、また、過去の事例が常に正解でないこともある。ゲームを通じ、それぞれの災害対応の



場面で、誰もが誠実に考え対応すること、そのためには災害が起こる前から考えておくことが重要であることに気づくことができました。夕食後には、陸前高田市企画部企画政策課・課長補佐兼政策推進係長の黒澤裕昭さんに「陸前高田市の復興とこれから~世界に誇れるまちを目指して~」というテーマでご講話をいただき、震災前・震災直後・これまで・そしてこれからの陸前高田市の状況や政策、まちづくりについて理解を深めることができました。

2日目は、小友町新田自治会長の渡辺鉦悦さんにコーディネートをお願いしました。米崎町西風道仮設団地の高台(陸前高田市の東側)から被災区画を鳥瞰した後、今度は長部高台造成地(同西側)へ移り津波襲来の方向や被災区画の広さを見学しました。その後、長部漁港にて10mある堤防の高さを体感し、松原堤防の全景も見学しました。見学を終えた後は、グローバルキャンパスに戻りふりかえりの時間を持ちました。「画像や映像ではなく自分の目で見て感じたことによって更なる衝撃を受けた」、「鉦悦さんの"自分が生きないと他人を救えない"という言葉は正にそのとおりだと思う」、「普段から災害がおきた場合の備えをしていくことが大切だと思った」など、参加学生がそれぞれの言葉で想いを共有しました。

実際に目で見て体験すること、自分の考えや想いをしっかりと言葉にしてアウトプットすること の重要性を再認識させられる2日間でした。

■ 立教たかたコミュニティ大学第2弾「宮沢賢治で社会学しよう!」 — 2017年12月16日

12月16日(土)、立教たかたコミュニティ大学第2弾「宮沢賢治で社会学しよう!」をモンティ・ホールにて開催しました。36名の方の参加がありました。

講師の筒井久美子さん(立教大学大学院博士課程満期退学)は、「社会学」とは「あたりまえ」とは異なるものの見方を可能にする学問ですという説明をしたのち、参加者に「あたりまえ」の外に出る社会学的「実験」を体験してもらいました。続いて、宮沢賢治の2つの作品からクイズが出され、参加者は「あたりまえ」とは異なる見方を体験しました。1つ目の「蠕虫舞手(アンネリダタンツェーリン)」には、 α や γ などの文字の形自体をボウフラに見立てるという見方が、2つ目の「岩手山」には山を「地」、空を「図」として見るという私たちの見方とは「地」と「図」を反転さ

せた見方が提示されており、いずれも私たちの「あたりまえ」とは異なる見方が示されているという説明がありました。

後半は社会学者の見田宗介による賢治研究が紹介されました。見田さんによれば、賢治は、他者を殺さなければ生きられないというこの世界の構造に対して、「焼身」や「自己犠牲」という在り方を提示していきます。さらに、「わたくし」=「自我」を絶対化する立場から離れることで「殺し合い」は「生かし合い」として見ることが出来ること、そして「自我」を取り囲む存在の「地」の部分は実は輝きに満ちていることを感受できれば「自我」の解体は「自我」からの解放だと考えたと言います。見田さんの議論が紹介されたのち、講師から参加者に対して、見田さんの議論を肯定するか否定するかが問いかけられ、両方の立場の方から意見が出されました。

社会学的「実験」やクイズを交えたり、参加者にコメントを求めたり、参加者が賢治作品を読み上げたりと、講義は聴衆参加型で進んで行きました。終了後は講師に質問したり、感想を述べたりする方もいらっしゃいました。講義は普段考えないような話で少し難しいところもありましたが、参加者それぞれが自分自身に引きつけて考えを進めていたのが印象的でした。

■ 「たかた子どもキャンパス」パソコン作り教室 ― 2017年12月16日

2017年12月16日(土)、「たかた子どもキャンパス」のプログラムの一環として小学校4年生から6年生を対象に、パソコン作り教室が、陸前高田グローバルキャンパスにおいて陸前高田市教育委員会主催、立教陸前高田サテライトの共催で開催されました。

この企画は、今年の夏休みに開催が予定されていましたが、台風の影響で中止となり、関係者の強い要望により、 開催されることになったものです。

講師には、子ども向けコンピューター "IchigoJam" の プログラミング事業を展開している (株) ナチュラルスタイル代表の松田優一氏を福井県からお招 きしました。

15日の夜、子どもたちをサポートしてくれる大学生(立教大学、岩手大学、聖心女子大学)に、翌日の教室とまったく同じ体験をしてもらいながら、子どもたちに事故がないよう万全を期しました。

当日の参加者は残念ながら7名と少なかったのですが、IchigoJam の回路を半田ごてでつなぎ起動させる、プログラムを打ち込み小さな電灯を自由の点滅する、ゲームを創るなど、3時間にわたる教室でした。

その間、子どもたちはみんな集中し、回路がうまくつながった時やゲームを創れた時には、 ちょっと照れながらもとても嬉しそうな笑顔を見せてくれました。周りの大人たちの方が興奮気味 で都度、拍手が沸き起こっていました。

完成した IchigoJam、モニター、キーボードはクリスマスプレゼントとして子どもたちに持ち帰ってもらいました。今回の企画に要した経費は、すべて立教大学校友の IT 企業の 2 名の社長さんから寄付していただきました。ありがとうございました。

陸前高田グローバルキャンパスの別名は、「たかたのゆめキャンパス」です。今回の企画を通じて子どもたちに「ゆめ」を届けられたと思います。きっと近い将来、参加した子どもたちの中から優秀なプログラマーが育ち、高田の新しいまちづくりに貢献してくれると思います。





■ <u>立教大学学生団体主催のクリスマス会</u> 「みんなでわいわいクリスマス!」 — 2017年12月23日

2017年12月23日に、「みんなでわいわいクリスマス!」と題して、地元の皆さまに向けたクリスマス会を開催しました。これは、私たち、立教大学の復興支援団体 Frontiers (池袋キャンパス)、Three-S (新座キャンパス)が合同で企画をしたものです。当日は両団体所属の学生スタッフ13名、



大学職員1名が運営にあたったほか、高田高校の高校生が2名、ボランティアでの参加をしてくださいました。また、クリスマス会には地元から約60名の方が参加をしてくださり、そのうち約50名は小中学生、未就学児などの子どもたちでした。当初の私たちの予想人数を上回る多くの方にお越しいただき、学生一同たいへん感激いたしました。

イベントは、事前に学生同士で話し合いを重ね、企画し

たものを柱立てにして行いました。キャンパス全体を使ってクイズに答えながら学生扮するサンタクロースを探す攻略型ゲーム「サンタをさがせ!」や、地元箱根山から拾ってきた松ぼっくりを使った「松ぼっくり飾りづくり」、また参加者全員でクリスマスカードを作ってその場で交換する「クリスマスカード交換」、ビンゴ大会などを行いました。

今回は私たちにとって初めての試みで、不慣れな点も多々ございましたが、楽しかったとのお声を頂いたり、子どもたちの盛り上がる様子を見たりして、私たちにとってもたいへん楽しい時間となりました。学生一同、少しでも何か地元の方々に楽しんでいただける時間を作れたらという一心で企画・準備を進めてまいりましたが、ご参加くださった皆さまにとって少しでも来てよかったと思っていただけましたら幸いです。また何かこのような形の催しを開くことができたらと思っています。

■ シンポジウム

「高田から世界を考える〜難民の世紀に生きる私たち〜」―― 2018年1月21日

2018年1月21日(土)14時より、陸前高田市コミュニティホールにて、2017年度立教たかたコミュニティ大学第3弾 シンポジウム「高田から世界を考える~難民の世紀に生きる私たち~」(主催:立教大学陸前高田サテライト、共催:陸前高田グローバルキャンパス、後援:陸前高田市・陸前高田市教育委員会・UNHCR 駐日事務所)を開催しました。



第1部では、岡本雅之氏(陸前高田市副市長)にご挨 拶を頂いたあと、発題者である長有紀枝氏(立教大学大学

拶を頂いたあと、発題者である長有紀枝氏(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授、国際 NGO「AAR Japan 難民を助ける会」理事長)・木山啓子氏(国際 NGO「JEN」共同代表理事、学校法人立教学院理事)が、難民の定義や国内外における難民・国内避難民の現状、恒久的な課題、それぞれの組織で取り組んでいる難民支援活動について紹介しました。次に県立高田高校・同住田高校・同大船渡高校・同大船渡東高校の各校1名の高校生が、震災以降に高田や気仙地区を元気で活気ある町にしていくために取り組んできたことについて紹介しました。

第2部は、村上清氏(岩手大学学長特別補佐、陸前高田市参与、元国連職員)も交え、「高田から世界を、世界から高田を」をテーマにディスカッションを行いました。木山氏が進行役となり、第1部で高校生達がそれぞれの活動を始めたきっかけや、逆に、長氏や木山氏が難民支援活動を始めたきっかけなどを質問しあったり、震災後に受けた支援で有りがたかったことやその時の心情な

どについて活発な意見交換が行われました。高校生からの正直な気持ちの吐露もあり、それに来場者の市民の皆さんが頷いていた様子が印象的でした。また、人口減少が課題となっている気仙地区で移民を受け入れるとしたらどのような対応が必要になるかなどといったことについても意見交換が行われました。村上氏からも国連で働くことになった経緯や、いつ支援をする側からされる側になるかわからないことなどをご自身の経験をもとに話しがありました。ディスカッションの最後に、高校生達がこれから頑張って行きたいことを話してくれましたが、全員が共通して、「起きてしまったことは仕方がない、震災があったからこそ出会えた人や学べたことがたくさんあるので、それを今後の人生に活かしていきたい」と前向きな発言をしていたことも印象的でした。最後に池上岳彦(立教大学陸前高田サテライト長、立教大学経済学部教授)より閉会の挨拶があり、盛会のうちに閉会しました。

総勢82名の方々にご来場いただきました。たくさんのご来場ありがとうございました。

■ 陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム2018 — 2018年3月3~4日

陸前高田グローバルキャンパスが主催し、陸前高田グローバルキャンパスを会場に標記シンポジウムを行いました。このシンポジウムは今回が2回目の開催です(前回は陸前高田市コミュニティホールで実施)。

2日間で約220名が参加し、全国11の大学の研究者・学生による発表や地元団体、地元中高生による取組発表と参加者によるディスカッション、園芸農業振興に向けたワークショップなどを行いました。

会場では、たくさんの新しいつながりが具体的に生まれ



る場面が多々見られました。昨年に比べ一歩踏み込んだ、大学と三陸市民の交流とその先にある協働の可能性が見えたシンポジウムに なったのではないかと考えています。熱気と刺激に満ちた2日間となりした。

本シンポジウムのプログラムや発表要旨はRTGCホームページの「ダウンロード(刊行物・様式等)」(https://rtgc.jp/download/) に掲載していますので、ぜひご覧ください。





陸前高田グローバルキャンパス 利用状況等

i) 利用者数

■ 利用区分ごと

利 用 区 分	利用者数	利用件数
立教大、岩手大、陸前高田市	1,637	76
市民、市民団体	1,708	137
一般	1,222	57
賛助会員	80	7
計	4,647	277

■ 月別利用者数

年 / 月	利 用 者 数	利 用 件 数
2017/5	104	7
2017/6	343	15
2017/7	335	19
2017/8	622	37
2017/9	517	35
2017/10	482	21
2017/11	341	26
2017/12	459	30
2018/1	304	23
2018/ 2	554	34
2018/3	586	30
= †	4,647	277

ii) 陸前高田グローバルキャンパスで行われた活動一覧

下記活動の内容は RTGC ホームページ (https://rtgc.jp) でご覧になれます。

	TGC ホームページ(https://rtgc.jp)でご覧になれます。
実施日	
2017年5月13日	岩手大学「震災復興に関する学修」
2017年5月28日	「あがってかだって大作戦」第1弾 オリジナルプランター作り
2017年6月3日	立教大学、岩手大学合同哲学カフェ
2017年6月4日	第2回「子どもてつがく探検隊」
2017年6月24日	岩手大・震災復興に関する学修&㈱パソナご一行訪問
2017年6月25日	第6回立教野球教室
2017年6月25日	陸前高田・夢がふれ逢う〜お楽しみ「朗読会」
2017年7月3日	農を通して食と健康について考えるワークショップ
2017年7月8~9日	グローバルユースキャンプ in 陸前高田
2017年7月9~14日	東京大学・プリンストン大学サマープログラム2017
2017年7月23日	"雨にも負けず"宮沢賢治の勉強会(第3回)
2017年7月27~28日	熊本の大学生と岩手の大学生の交流
2017年8月1~10日	関西大学商学部長谷川ゼミ 陸前高田研修
2017年8月4~8日	立教大学 RSL-ローカル (陸前高田)
2017年8月5~8日	ハーバード大学・岩手大学 陸前高田グローバルセミナー2017
2017年8月8~11日	国際ボランティア in 陸前高田
2017年8月9日	Summer Day Camp in Rikuzentakata! ~子供たちと英語でふれあい遊び~
2017年8月11日	盛岡中央高校 陸前高田グローバルキャンパス研修
2017年8月20日	「あがってかだって大作戦」第2弾 釣り大会
2017年9月7~11日	立教大学・スタンフォード大学生 フィールドワーク
2017年9月10日	立教大学落語研究会「サテライト健康寄席」
2017年9日~現在	地元英語人財の育成「英語音読会」
2017年9月30日	「あがってかだって大作戦」第3弾 ゆめきゃん大学ゼミナール第1講
2017年10月26日	復興庁「結の場 in 陸前高田」
2017年11月2~3日	つなぐ・つたえる・学生交流と協働研究セミナー
2017年11月18日	戸口純と仲間たち たかたの夢ピアノ・コンサート
2017年12月9~10日	立教大学陸前高田スタディツアー2017
2017年12月16日	立教たかたコミュニティ大学第2弾 「宮沢賢治で社会学しよう!」
2017年12月16日	「たかた子どもキャンパス」パソコン作り教室
2017年12月23日	クリスマス会「みんなでわいわいクリスマス!」
2018年1月21日	シンポジウム「高田から世界を考える 〜難民の世紀に生きる私たち〜」
2018年3月3~4日	陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム2018

このほかにも様々な団体等による活動が行われていますので、RTGC ホームページ(https://rtgc.jp/)でご確認ください



資料

陸前高田グローバルキャンパス関連組織の構成

■ 岩手県陸前高田市、岩手大学、立教大学連携推進協議会

	氏 名			
役 職 等	2016.3~	2017.4~		
	2017.3	2018.3		
陸前高田市長	戸 羽 太	戸 羽 太		
岩手大学長	岩渕明	岩 渕 明		
立教大学総長	吉 岡 知 哉	吉 岡 知 哉		
岩手大学副学長	八代仁	八代仁		
立教大学副総長	西田邦昭	_		
立教大学陸前高田サテライト長	_	池上岳彦		

■ 岩手県陸前高田市、岩手大学、立教大学連携推進協議会企画運営委員会 ≪2016年3月~2017年3月≫

役 職 等	氏	名
岩手大学副学長	八代	仁
立教大学副総長	西田	邦 昭
立教大学経済学部教授	池上	岳 彦
立教大学コミュニティ福祉学部教授	松山	真
立教大学総長室社会連携教育課課長	佐 藤	一宏
立教大学総長室調査役	藤枝	聡
岩手大学学長特別補佐	村上	清
岩手大学 COC 推進室特任教授·学長特別補佐	小野寺	純治
岩手大学理工学部教授・地域防災研究センター長	南	正 昭
岩手大学農学部教授	廣田	純一
岩手大学人文社会科学部教授	五味	壮 平
岩手大学地域連携推進部地域連携・COC 推進課課長	早 川	浩 之
陸前高田市教育委員会次長	堺	伸 也
陸前高田市教育委員会係長	吉 田	志 真

≪2017年4月~2018年3月≫

役 職 等		氏	名	
岩手大学副学長	八	代		仁
立教大学陸前高田サテライト長・経済学部教授	池	上	岳	彦
立教大学コミュニティ福祉学部教授	松	Щ		真
立教大学総長室特別嘱託	西	田	邦	昭
立教大学総長室社会連携教育課課長	佐	藤	_	宏
立教大学総長室調査役	藤	枝		聡
岩手大学学長特別補佐	村	上		清
岩手大学 COC 推進室特任教授・学長特別補佐	小里	予寺	純	治
岩手大学理工学部教授・地域防災研究センター長	南		正	昭
岩手大学農学部教授	廣	田	純	
岩手大学人文社会科学部教授	五	味	壮	平
岩手大学地域連携推進部地域連携・COC 推進課課長	早	JII	浩	之
陸前高田市企画政策課課長	村	上	知	幸
陸前高田市企画政策課課長補佐	黒	澤	裕	昭

■ 陸前高田グローバルキャンパス運営機構 役員会

職名	氏	名	1	備	考
岩手大学副学長	八代		仁	機構長	
立教大学陸前高田サテライト長・経済学部教授	池上	岳	彦	副機構長	
岩手大学人文社会科学部教授	五味	壮	平		
立教大学コミュニティ福祉学部教授	松山		真		
岩手大学学長特別補佐	村上		清		
立教大学総長室調査役	藤枝		聡		
岩手大学地域連携推進部地域連携・COC 推進課課長	早 川	浩	之		
立教大学総長室特別嘱託	西田	邦	昭		
岩手大学 COC 推進室客員教授	井上	博	夫	2017.10.1	5~

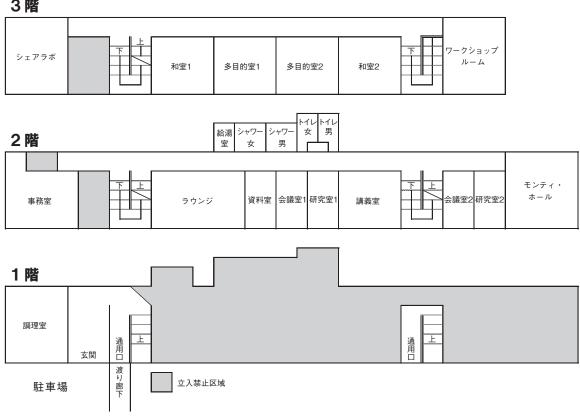
※任期: 2017. 4.1 \sim 2019. 3. 31 (終期は井上客員教授含む)



陸前高田グローバルキャンパス館内図及び設備

■ 館内図

3階



■ 館内設備

- ●館内 無料 Wi-Fi
- ●ラウンジ 自動販売機、コインコピー機、大型テレビ、ブルーレイディスクレコーダー、マッサージ チェア
- ●モンティ・ホール プロジェクタ、スクリーン、マイクアンプ (無線マイク2本付)、演台、マイクスタンド
- ●貸出物品(RTGC 利用者のみ利用可、無料) プロジェクタ、スクリーン、マイクアンプ (無線マイク2本付)、掲示用パネル、電動自転車

各部屋の様子は RTGC ホームページ(https://rtgc.jp/)に掲載しておりますので、ぜひご 覧ください。

陸前高田グローバルキャンパス利用料金表

■ 陸前高田市内在住の方/団体(参加費等を徴収して利用する場合)および一般の方

室 名	午前 9:00~13:00	午後 13:00~17:00	夜間 17:00~21:00	終日 9:00~21:00
モンティ・ホール	1,300	1,800	1,500	4,600
会議室1	400	500	500	1,400
会議室 2	500	600	600	1,700
多目的室1・2	800	1,000	900	2,700
ワークショップルーム	900	1,200	1,100	3,200
和室 1・2	800	1,000	900	2,700
講義室	800	1,000	900	2,700

■ 陸前高田市内在住の方/団体(参加費等を徴収しないで利用する場合)および賛助会員の方

室 名	午前 9:00~13:00	午後 13:00~17:00	夜間 17:00~21:00	終日 9:00~21:00
モンティ・ホール	700	900	800	2,400
会議室1	200	300	300	800
会議室 2	300	300	300	900
多目的室1・2	400	500	500	1,400
ワークショップルーム	500	600	600	1,700
和室 1 · 2	400	500	500	1,400
講義室	400	500	500	1,400

利用申込方法や賛助会員の申込方法は RTGC ホームページ(https://rtgc.jp/)に掲載しておりますので、ぜひご覧ください。



陸前高田グローバルキャンパス関連冊子等

■ 陸前高田グローバルキャンパス・リーフレット (2018/7版)
https://rtgc.jp/wp-content/uploads/2018/07/cffdcf70e9e56345f823fadcd03d63a3.pdf



■ Rikuzentakata Global Campus Leaflet (English ver.) (2017/1版)
https://rtgc.jp/wp-content/uploads/2017/04/9fb26be7341cad0e64c88eabf3b0fc07-1.pdf



■ 陸前高田グローバルキャンパス利用案内(2018/4/1版) https://rtgc.jp/wp-content/uploads/2017/09/180401_riyou_annai.pdf



■ **陸前高田グローバルキャンパス 大学シンポジウム2018 要旨集**)
https://rtgc.jp/wp-content/uploads/2018/03/c7d5497549649af22aba7de7eae216ca.pdf



■ 立教大学陸前高田サテライト webサイト https://spirit.rikkyo.ac.jp/rikutaka/SitePages/index.aspx



RTGC ホームページ(https://rtgc.jp/)の「ダウンロード(刊行物・様式等)」には、2016年度に実施した大学シンポジウムの発表論文集やRTGCの利用申請書様式も掲載していますので、ぜひご覧ください。

陸前高田グローバルキャンパス 2017年度報告書

発行日 平成30年12月20日

発 行 陸前高田グローバルキャンパス運営機構

